鋼殻のレギオス　　天剣を携えし刀姫

ルオト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鋼殻のレギオス　　天剣を携えし刀姫

【Ｎコード】
Ｎ７７２４Ｙ

【作者名】
ルオト

【あらすじ】
少女はただ守りたかった。大切な人達を。大切な故郷を。
だが、その願いは、嫉妬と悪意によって閉ざされ、少女は故郷を去り、遠き異郷の地へと旅立つ。
遠き異郷の地は存亡の危機だった。少女は刀を取り、その地を守護することを決意する。
その決意が導く結果は・・・・・・

プロローグ

変えたのはたくましい背中の青年だった。
少女は共に暮らす家族の中で自分だけが、特別な扱いをされるのが嫌だった。
そんな中、たまたま出会った青年が少女にこう言った。
「今は甘えとけ。そんで、いつか家族にその恩を返せるように強くなって、護ってやればいい。外をうろつく化け物や心無い人間からな」
青年の言葉は少女を強くした。
本当は少女は闘う事が好きではなかった。
人は勿論、外を王者のごとく君臨する人類の天敵である汚染獣もどちらも怖かった。
だけど少女は懸命に刀を握った。
大切な人達を守りたかった。
大切な人達が暮らす都市を守りたかった。
少女は懸命に走り続け、いつの間にか都市でも最高位の武芸者の称号を得ていた。
だが・・・・・・・少女とは無縁のことがら。嫉妬と悪意によってある事件が起き、少女は生まれ育った故郷を一時離れる事を選択する。
少女の家族は勿論、多くの人達が少女を止めたが、少女は周囲の制止を聞き入れず仮初の新天地を目指す。

「ん。もう直ぐ着くのか」
茶色の髪を腰まで伸ばした少女は放浪バスから見える都市の旗を

見て、自然と微笑を浮かべる。
その笑みは純粋な幼さと、どこか達観した大人の雰囲気が混ざり合っていた。
学園都市・ツェルニ。今日から少女の暮らす都市だ。
少女はこれから始まる新たな生活に、期待と不安が押し寄せてくる。
「六年か。長いよね。でも愚痴は言えないね。自分で選んで自分で決めた事だから」
少女は改めて自らの行動によってこの都市に来る事になった経緯を思い出すと、改めて決意する。
その日から少女レイムリア・サイハーデンの新たな生活が幕を開ける

プロローグ（後書き）

とある二時作品に影響を受け、鋼殻のレギオスの二時作品に挑戦する事にしました。

正直、原作の面白さを損なわない作品にできるか不安ですが、駄文ながらに付き合ってくれると幸いです。

第一話　ツェニルの支配者との対談

（・・・・・・私、どうしてこんな所にいるんだろう？）

レイムリアはひどく自分が場違いな場にいる事を認識しながら、やや緊張した面持ちで目の前に座る青年と向き合っていた。

銀色の髪に知的なメガネの青年カリアン・ロス生徒会長。

この学園都市の支配者に当たる人物だ。

レイムリアがここに呼ばれたのは、入学式での乱闘騒ぎの所為だ。敵対する都市同士の武芸者が鉢合わせになり、あわや大混乱になるのをレイムリアが問題の二人を投げ飛ばして、それを止めたのだ。

当初レイムリアはその騒ぎを静観するつもりだった。入学式そうそうに要らぬ注目を集めるつもりは無かったからだ。

だが一人の一般女子生徒が突き飛ばされるのを見て気が変わった。そして原因の生徒二人を投げ飛ばし暴動を鎮圧してしまった。

そうしてこの場に連れてこられたレイムリアだったが、何故ここに連れてこられたのか全く見当がつかなかった。

「ふむ。レイムリア・サイハーデンさん。私は君を罰しようとしているわけではないよ。むしろ君に礼を言う為にここに呼んだよ」

「そうですか。だったらもう私には用事はありませんね。それでは失礼しま」

「まあ、待ちたまえ。君については少々調べさせてもらったよ。レイムリア・サイハーデン。希望は一般教養科。奨学金はDランク。就職先は機関掃除。

これで六年はつらいよ」

カリアンの問いは正しい。だがレイムリアにはお金が無かった。

本当は違う学科に行きたかったし、自分の時間を多く削られる就職もしたくないが、レイムリアは援助してくれるあても無く、さらに学力もとある事情であまり高くない。

今の待遇こそがレイムリアにとって現状望みうる最高の環境なの

だ。
「そうですけど、私の家は貧乏ですし、私自身あまり賢くもありません。これで六年頑張る以外には」
「そこで提案なんだが、武芸科に転科するつもりはないかい？それなら奨学金もＡランクに上げよう」
「え！？」
カリアンからの突然の提案は、レイムリアにとっては望外の提案だった。
武芸科に転科すれば、最低限の訓練ができる。そうすれば、自己鍛錬くらいは出来る。最低限実戦の勘をある程度、落とさずに済む。
さらに奨学金もＡランクとなれば、機関掃除のバイトもあまりする必要も無く鍛錬に、より身を置く事が出来る。
レイムリアとしては生徒会長が提案を撤回しないうちに、即決で決めたいのが本音だが、ここまでレイムリアにとっていい話だと、逆に裏がありそうなので、一応訊ねてみる。
「あの、どうしてこんないい待遇で私を武芸科に転科させてくれたんですか？私は一応一般科を希望したただの一年生ですよ？」
「そうだね、レイムリア・ヴォフシュティン・サイハーデンさん」
カリアンがその名を口にした瞬間、レイムリアの表情が消え、視線が刃のように鋭くなる。
「・・・・・・私の事を『知っている』なら、この善意は何かしらの報酬という事ですか？」
「・・・・・・・・そう、あからさまな物では無いよ。ただ君には武芸科に所属してもらって、ある事をしてもらいたいんだよ」
笑みを深めながらカリアンは、今年都市同士の戦争、都市対抗戦がある事、そしてツェルニには一敗でも敗北すれば、都市の命であるセルニウム鉱山を失う事を話した。
「なるほど、解りました。微力ながら都市存続の為に私の刃を振りわせてもらいます」

「そうか。引き受けてくれるのかい。ありがとう」
「構いません。ただ次からは妙な駆け引きや裏のある交渉は控えてください。私はその手の駆け引きが苦手です。率直に話してくれた方が、話しが速くて助かります」
「そうかい。解ったよ。次から君に頼みごとをする時は率直に協力を仰ぐ事にするよ」
「助かります。それと私の事はあまり言いふらさないでください。無用な注目は、その、好きでは、無いので・・・・」
　刃の様な鋭い視線が消え、どこか気恥ずかしそうにするレイムリア。その様子は先程までの他者を圧倒す武芸者の顔では無く、どこにでもいそうな普通の少女の顔その物だった。
　あまりのギャップに思わずカリアンは苦笑した。
「解った。約束させてもらうよ。それと早速で悪いが、ひとつ君に頼みがある」
「？何でしょう」
「なに、ある小隊に所属して欲しいのだよ」
「小隊？」
　カリアンは小隊について簡単に説明する。
　武芸科でも優秀な者達が、チームを組み、戦争時の中核となる為の部隊だという事を説明する。
「なるほど、それで私をその、小隊に？」
「ああ。君ほどの実力者だ。末端の兵より、小隊員でいてくれた方がこちらとしても作戦を立てやすい。さらにこちらとしても援助の口実になる」
「・・・・・・援助は別にいいですけど、そう言う事なら引き受けさせてもらいます。後でその小隊の人の所に行けばいいんですか？」
「いや、向こうから接触させるよ。では、これからよろしく頼むよ」
　カリアンはそう言うと、右手を差し出す。レイムリアは少し躊躇ったが、その手をキッチリと握り返した。

「ふう。予想以上にうまく話がまとまったな」
レイムリアが退出した後、カリアンは予想外に話し合いがスムーズに言った事に安堵したが。
「さすが、槍殻都市・グレンダンでも最強の十二人の一人だね。少し睨まれただけで、手の震えが止まらないとは・・・・・・」
そうカリアンはレイムリアの前では平静を装っていたが、睨まれた瞬間、一瞬気絶するのではと思うほどの圧力を感じた。
そして思う彼女、レイムリア・ヴォルフシュティン・サイハーデンという名の少女は、絶対に敵対できないと。
敵対したが最後、おそらく、ツェルニは彼女一人に滅ぼされるだろう。
現状は彼女が協力的なのが幸いして、幸先のいい関係が築ける土壌が出来た。
後は彼女に出来るだけの便宜をはかり、出来るだけこちら側にするだけだが・・・・・
「さて、彼女はどうすれば、こちら側に繋ぎとめられるかな」

第二話　出会い

早速武芸科の制服に着替えたレイムリアは、笑みを浮かべながら教室へと向かった。

（ん～いい出だしね。六年も訓練が出来ないのは、キツイと思ってた矢先に思わぬ申し出があったおかげで、不安が全部解消！）

レイムリアにとってカリアンの申し出は本当にありがたかった。

奨学金のアップに、訓練できる環境をくれたのだ。

レイムリアにとってそれは物凄く重要だったし、カリアンの頼みである都市を守る事も、レイムリアの信念から言えば、むしろこちらから力を貸すという内容だった。

つまりカリアンの提案はレイムリアにとっては、マイナスがホトンド無く、むしろプラスの要素が多い。

自然と笑みがこぼれてしまう。

唯一の懸念は小隊の事だ。正直な話、レイムリアは他人と共にチームを組んで戦う事がホトンド無かった。

だからチームを組んで戦う事に不安を感じるが、それも一つの経験になる。

それに、本番の試合以外の勝敗はそれほど重要ではない。

最悪、カリアンに頼んで本番の試合の時は、単独突撃を許可してもらえばいい。

つまり、レイムリアにとってはその程度の話だった。

「あ、やっぱり武芸科の人だったんだ」

栗色の髪を二つにくくった少女が嬉しげに声を上げる。

「さっきは一般教養科の制服を着ていたぞ。私は一般教養科の制服なんて持っていないぞ」

今度は長身の赤い髪の少女が不満そうに言う。

「え？あの、あなた達は？」

突然赤毛の少女に問い詰められ、困惑するレイムリア。

「あ、ああ、済まない。取り乱して。武芸科一年ナルキ・ゲニルだ」
「んで、私が、ミィフィ・ロッテン。一般教養科だよ。で、こっちに隠れてるのが・・・・」
ミィフィがナルキの陰に隠れるようにしていた三人目を前に出す。
「メイシェン・トリンデント。この子も一般教養科ね」
と隠れていたメイシェンの代わりに、ミィフィが紹介をする。
「ん？あ！」
メイシェンの顔を見てレイムリアは思い出す。あの新入生が暴動を起こしかけた時、突き飛ばされた一般教養科の生徒だ。
「そっか、無事だったのね。良かった。あの後、私、生徒会室に呼び出されたからあなたが怪我してないかとか、確認できなかったから気になってはいたのよ。
でもよかったわ。それにしても同じクラスか。凄い偶然だね」
レイムリアは満面の笑みを浮かべると、無意識にメイシェンの頭をなでた。
「！！・・・・・・・・・！！！」
なでられたメイシェンは、なにも言わず顔を真っ赤に染め、うつむいてしまった。
「？・・・・・・あ！ごめん。つい、その、馴れ馴れしかった？」
「・・・・いえ、大丈夫、です。さっきは、助けてくれて、ありがとうございます」
メイシェンは恥ずかしそうに言う。
その様子に少なくとも先程のレイムリアの態度を怒っている様子は無い。その事に深く安堵するレイムリア。
「ん。別に大したことは無いわ。あんな自分勝手な武芸者が一般の人達を傷つける行為が嫌いなだけ。だから、メイシェンさんも気にしないで」
レイムリアは笑みを浮かべながらそう言うと、メイシェンは顔をうつむかせたまま小さく頷いた。
その様子をミィフィもナルキもどこか嬉しそうに見ている。

そこで、レイムリアは自分がまだ名乗っていない事に気付き、慌てて名乗った。
「あ、ごめんなさい。まだ名乗ってなかったね。私はレイムリア・サイハーデン。元々は一般教養科だったけど、生徒会長さんが今回の事件を未然に防いでくれたお礼にっという事で、武芸科に転科したの」
簡潔な自己紹介に何故か三人は驚いた。
「転科？たったそれだけで？どうしてだ！？」
思わず驚きの声を上げるナルキ。
「んむむ。これは、何か、裏事情がありそうね」
妙に鋭い視線を向ける、ミィフィ。
「・・・・・・」
唯一メイシェンだけは何も言わなかったが、その目は明らかに、好奇心が見え隠れしている。
「えっと、その・・・・・」
とっさにうまく説明できなかったレイムリアは、その後三人に連れられ、喫茶店へと向かい詳しい話を聞かれる事となる。

「ふ～ん。つまりレイちゃんは、あのグレンダンで武芸者としてそれなりに強かったから特別待遇で、転科したって事」
ミィフィがパフェをつつきながら、レイムリアの説明を納得の表情で頷く。
「だが、あのグレンダンで武芸者としてそれなりに強く、しかも汚染獣とも戦ったんだろ？だったらなんで都市の外、学園都市に来たんだ？」
ナルキの真っ当な疑問にレイムリアは内心苦笑した。
そう、レイムリアは本来都市を出る必要などまったくなかった。
なのに都市を出たのは単なるワガママだ。

むしろ家族や陛下、それに何かと自分を慕ってくれる人々も最後は自分が都市を出る事を納得した。今考えると、とても不思議だ。
だが一部、納得できない人もいた。特にあの戦闘狂。彼はよく、「君と戦うとホント興奮するよ。レイムリア。僕だけのモノにならないかい？」などとフザケタ事をいつも言っているので、その度に思い切り手加減抜きの技を放ち、何度となく病院送りにしてやった。
あの戦闘狂も自分がいなければ少しは落ち着くだろう。と思ったが、
（・・・・・・なんか嫌な予感がしてきた。あの人、禁断症状が出て、ツェルニまで私と戦いに来ないでしょうね。もう少し入念にダメージを与えた方が良かったかしら？）
さらりと嫌な予感がしたが、あの怪我なら普通に二、三ヶ月は大人しくする筈だからまあ大丈夫だろうと、やや楽観的な結論で、自分を納得させると、ナルキの疑問に答える事にした。
「まあ、そんな大した事でも無いんだけど、故郷で少し、トラブルにあってね。少しい居づらくなったから、ほとぼりが冷めるのを待つついでに都市の外を見たくて、それでここに来たの」
「トラブル？どんな？故郷にいられなくなるトラブルって結構大事だよ！？」
「そうだな。多少の事でなら都市を出ようとは考えないからな」
「・・・・・・レイちゃん、大丈夫？」
三人の心配そうな表情に、レイムリアは慌てて、
「そんなに心配ないよ。むしろ居づらく感じたのは私だけだし、家族とか、知り合いとか、お世話になってる人達には、最後まで馬鹿な事はやめろって止められたくらいだったから」
そう言う。
実際家族である、孤児院の子供達には泣いて止められたし、幼馴染も半泣きで、「レイムリアが責任を感じる必要なんてないでしょ！！」と言ってくれた。
養父さんも、かなり渋い顔で引き留めてくれた。

他にもレイムリアがほかの都市に行く事を止めた人間は多い。
一部例外として、戦闘馬鹿なとある人物は自分の絶好の鍛錬相手が六年もいなくなる事を阻止すべく実力行使してきたが、きっちり病院送りにしておいた。
「ま、という訳でそんな気にしないで。たったの六年よ。六年後はちゃんと故郷に帰れるから特に問題ないわ」
レイムリアの気楽な言葉に、三人も表情を和らげる。
その後四人でたわいない談笑をしていると、
「あの・・・・・すみません。レイムリア・サイハーデンさんは、あなたですか？」
突然声をかけられ慌てて声の主を見てレイムリアは驚いた。銀髪の小柄で綺麗な少女だったからだ。
「あ、これは先輩。レイムリアに何か？」
ナルキの発言で、レイムリアは目の前の少女の剣帯の色が自分達と違う事に気付き、少女が上級生、しかも武芸科だという事に気がついた。
「用事があります。ついて来てください」
「そうですか。解りました。ごめんね、三人とも。また明日ね」
レイムリアはそう言うと代金をテーブルに置き、銀髪の少女について行った。

銀髪の少女に案内されて場所はやや古びれた会館だった。
その一室で、やや目つきの鋭い金髪の少女・第一七小隊の隊長二ーナ・アントークがレイムリアに対し小隊について（カリアンがした説明より詳しく）説明した。
「さて、レイムリア・サイハーデン。小隊について理解したか？」
「ええ。まあ。それで、アントーク先輩はなんで、わざわざ私みたいな一年にそんな事を説明してくれたんですか？」

カリアンから事前に説明されているレイムリアだったが、初対面でどういう性格かまるで分らない二ーナとい先輩を少しでも知るため、あえてとぼけて訊ねてみた。
「ぷはははは」
寝転がり様子を見ていた、やはり上級生の男子生徒が突然笑い声を上げる　。
「シャーニッド先輩！」
「いや、二ーナお前が悪い。お前がもって回った言い方するから、この可愛い新入生に上手くとぼけらたんだよ」
上級生の男子生徒は立ちあがり、レイムリアに近づく。
「初めまして。武芸科四年のシャーニッド・エリプトンだ。この小隊では狙撃手を担当してる。暇な時のデートの相手はいつでも誘ってくれ」
「はぁ。どうも」
初めて接するタイプに、レイムリアは若干困惑の声を上げる。
シャーニッドの軽い言葉で、話がそれた事を感じた二ーナは、咳ばらいをし、話しを元に戻す事にした。
「さて単刀直入に言う。レイムリア・サイハーデン。私は君を第一七小隊の隊員に任命する。拒否は」
「いいですよ。引き受けます」
二ーナのセリフを遮るように、レイムリアは承諾の返事をする。
二ーナは勿論、シャーニッドも銀髪の少女も驚いたようにレイムリアを見る。
「・・・・・・・ずいぶんと簡単に承諾するんだな。どういうつもりだ？」
「特に拒否する理由がありません。それに、私自身武芸は好きですから、訓練できる環境が整うなら、特に問題はありません」
レイムリアの言葉に二ーナは少しだけ感心するような視線を向け、すぐに元の鋭い視線でレイムリアを見る。
「そうか。ではお前がわが隊のどのポジションに相応しいかテスト

を行う。好きな武器を取れ」
　二ーナがそう言うと、ツナギを着た少年が簡易武器の束を運んできた。
　ツナギの少年の持ってきた武器の束の中からレイムリアは、早速目的のモノを探すが。
（・・・・・・さすがに刀剣の種類はそれなりにあるみたいだけど、なんで肝心の刀が無いの！？）
　レイムリアが納めたサイハーデンの技は刀でこそ真価を発揮する。特にレイムリアがサイハーデンの刀技を改良した、レイムリアのオリジナルの技は刀でないと十分な力が出せないが、無い物ねだりしても仕方が無いと、レイムリアは深い溜息と共に諦め、普段握る刀と同じ重さ程度の剣を使う事に決めた。
「さて準備はいいか？ではいくぞ！」
　二ーナは両手に鉄鞭を握ると、いきなりレイムリアに突っ込んできた。
　レイムリアは二ーナの双鉄鞭を剣でさばきながら、二ーナの実力を確認すると同時に、慣れない剣での戦闘になれる為に、剣を振るう。

　二ーナの攻撃をさばきながら、レイムリアは何とも複雑な気分になった。
　二ーナの実力は、悪くは無い。
　グレンダンのレベルで考えるならば、少なくとも武芸者を名乗る事ができるレベルだ。
　だが横で見ているシャーニッドが、レイムリアが二ーナの攻撃をさばいている事に驚いた事に、レイムリアは驚いた。
　この程度の攻撃など、グレンダンでは武芸者を名乗るなら防げて当然だ。
　それに、レイムリアから言わせれば、今の自分の動きは酷くぎこちなく、正直知人が見たら、何をふざけているんだ！と怒られるよ

うな無様なモノだ。
そんな動きを見て驚いている時点で、ツェルニの武芸者のレベルがグレンダンに比べてかなり低い事が判る。
（・・・・・・・・生徒会長が私に協力を求めてきた理由が少しわかったわ）
これからの事を考えるとレイムリアはかなり頭の痛くなるが、対照的に二ーナはかなり満足げな表情を浮かべている。
大方一年にしては強いと喜んでいるのだろう。
その事もレイムリアにとっては頭痛の種だ。
これだけ打ちこんでいれば普通は気付くはずだ、レイムリアが試験とやらが始まってから、ずっと受けに徹している事に。
レイムリアがその気になれば一瞬で勝つ事も、攻守を逆転させることも可能だが、二ーナの実力を見る為に全ての攻撃を受けているから今の状況が成立するのだ。
つまりレイムリアは思い切り手を抜いて戦っている。ある意味屈辱的な状況であるはずなのに、喜んでいる二ーナがある意味哀れになる。
（・・・・・・・さて、どうしよう）
レイムリアは真剣に悩んだ。
勝つ方法など、パッと考えただけで、十以上はある。
どの方法で勝ってもあまり気分がいい勝ち方では無い。
ならレイムリアは自分なりの敬意を表す方法で勝つことにした。
つまり、自分が編み出した刀技。
本来なら二ーナに使う必要さえ無いモノだ。
実際グレンダンにいた頃も、並みの相手には使用さえしなかったモノだ。
レイムリアは使うと決めた瞬間、今まで受け続けていた二ーナの鉄鞭をかわし、ほんのわずかな？間？を作った。
そのわずかな瞬間にレイムリアは構える。
剣を腰に構え態勢を低くする。居合、または抜刀といわれる刀剣

技の構え。
　初めてレイムリアが今までにない構えを見せた事に二ーナは笑みを深め、レイムリアに向かって突っ込んできた。
　だがもし、この二ーナの行動をグレンダンでのレイムリアを知る者が見たら、無謀と評するか、無知と評するだろう。
　この構えをとったレイムリアが、どれだけ恐ろしいかをグレンダンに住む武芸者は何度となく見ているから・・・・・
　レイムリアは剣を抜刀した。その距離は剣の間合いでは無い。
　だが風さえも斬るかのような神速の抜刀の放った、衝撃波が二ーナに直撃。
　二ーナは堪えきれずに、そのまま壁に直撃し意識を刈り取られた。
（・・・・・失敗ね。やっぱり刀じゃないと全然遅いね。それに？アレ？が無いからさらに遅いし、威力も無い。は～）
　レイムリアは先程自分が放った技が本来のそれに比べると、見るに堪えないモノだった事に凄まじく不満を感じた。
　レイムリアが放った技。本来のそれは、剣線を見ることさえ不可能とされる技だ。
　事実、グレンダンでもこの技を防ぐ事が出来る者はいても、放たれたこの技をかわした者はいまだ一人もいない程の絶技だ。
　流連刀舞・『閃刃』
　レイムリアが編み出した技（命名はほぼ、知人が行った）は、その全てがサイハーデンの理念である『生き残る事』をレイムリアなりに解釈し、とある知識をもとに編み出された技だ。
　生き残る事・・・・・・すなわち相手がどんな攻撃をしようとも、どんな頑強であろうとも、相手より速く一撃で斬る。
　事実レイムリアはこの技で数多くの汚染獣を一撃で斬り倒して来た。
　そんな一撃を不完全で衝撃波だけとはいえ、直撃したのだ。未熟な武芸者である二ーナが意識を失うのは仕方が無いだろう。
　と、そこでレイムリアは周囲の視線に気付いた。ツナギの少年も

シャーニッドという名の先輩も、レイムリアをここに連れてきた銀髪の少女も皆、唖然としていたからだ。
（・・・・・・・もしかして、やり過ぎたのかな？えっと、まぁ、この場は仕方が無いよね）
レイムリアはそう自己弁護すると慌てて、
「これで試験は終わりですね。あ、私、明日の準備があるんでこれで今日は失礼します。さようなら」
と、何とも演技くさいセリフを残して脱兎のごとくその場を去った。

こうしてレイムリアの長い学園生活初日は終わりを告げた。

第二話　出会い（後書き）

今回の話で、出てくる戦闘狂さんは天剣持ちのあの人です。
この話では彼とレイムリアの付き合いはそれなりに深い設定になっています。
いずれ過去編を掲載すると思いますが、彼はの事は多分かなりノリノリで暴れさせるつもりです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7724y/

鋼殻のレギオス　　天剣を携えし刀姫

2011年12月2日01時45分発行